

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320105

研究課題名（和文） 日本中世における「山の寺」（山岳宗教都市）の基礎的研究

研究課題名（英文） The fundamental research of YAMANOTERA (Religion cities on the mountains) in Japanese medieval times

研究代表者

仁木 宏 (NIKI HIROSHI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90222182

研究成果の概要（和文）：日本中世における「山の寺」の全国的分布を初めて明らかにし、それぞれの地域の特徴についても分析した。それぞれの地域の主導的研究者に研究協力者になっていただくとともに、シンポジウムの地方開催によって「山の寺」の学問的意義を広めることができた。市民向けの企画を通じ、「山の寺」研究の重要性、町づくりへの活用の可能性について理解を得た。

研究成果の概要（英文）：We solved the nationwide distribution of YAMANOTERA in Japanese medieval times for the first time, and analyzed the each local characteristics. We get leading researchers of each area to become research partnership persons, and held symposium locally. So we spread academic meaning of YAMANOTERA. Through citizen-oriented plans we got understandings to the importance of research on YAMANOTERA and the possibilities of the practical use to town plannings.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2008年度 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |
| 2009年度 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |
| 2010年度 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |
| 2011年度 | 4,900,000 | 1,470,000 | 6,370,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 14,500,000 | 4,350,000 | 18,850,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世、寺院、信仰、都市、山岳寺院、山の寺

1. 研究開始当初の背景

「山の寺」とは、山中・山麓に立地し、本堂・中心堂舎群（神社である場合も含む）を中核として、十数個から数百個の坊院がひな壇状に展開する施設群を総称している。天台・真言系の寺院が多い。平野部に多く展開する禅宗寺院、町の寺（律宗・時宗・法華宗）、

村の寺（一向宗）との比較で「山」を強調するが、必ずしも深山に立地するものには限らない。対象は、おおよそ9～16世紀、陸奥国から薩摩国におよぶ。

黒田俊雄氏の顕密体制、権門体制論（黒田俊雄著作集第1・2巻、法蔵館、1994年）以来、日本中世において寺院・仏教が果たした

役割の大きさについては共通理解となっている。しかし、日本中世における寺院と社会の密接な関係を論じようとした場合、こうしたいわば「中央」の研究だけでは十分ではない。地域社会において寺院・仏教がどのような展開を示していたかを具体的に解明する必要がある。

こうした視点に立った時、本研究が対象とする「山の寺」の重要性がうきぼりになってくる。「山の寺」の多くは宗教拠点であるだけでなく、卓越した荘園領主でもあった。寺僧の多くは周辺地域の武士・土豪などの子弟であり、各坊院は武士たちの菩提寺の役割を担った。大衆クラスの僧侶（いわゆる僧兵）はしばしば武装し、一大軍事力をもっていた。境内・門前や山下集落には職人や商人が居住するとともに、門前には時として市庭が形成され、もの作りや経済センターの機能を果たした。絵師や芸能民が寺院に所属し、文化的なセンターとなる場合も多い。

「山の寺」は、俗世との関わりを絶ち、山林修行を主たる目的に営まれた古代の山岳寺院に起源をもつ。その後、密教の興隆や浄土教の拡大、修験との結びつきなどを通じて中世固有の「山の寺」が成立してゆく。「山の寺」は、南北朝時代には南朝方の拠点として見え、室町時代から戦国時代にかけて継続的に発展して地域社会における中心核となってゆく。室町時代においては、守護所など武家方の拠点の中心性、求心性が低かったこと（仁木他編『守護所と戦国城下町』高志書院、2006年）を思い起こせば、「山の寺」は港町とならんで地域拠点としての意義をもっていたことがわかる。しかし、15世紀末から16世紀前半にかけて、各地で武家勢力が成長し、やがて大規模な城郭や城下町が形成されると「山の寺」の多くは衰退してゆく。「山の寺」が城郭に改造される事例が多くみ

られる。また一向宗が盛んな地域（近江・北陸）では、一向宗の伸張と反比例して「山の寺」がかつての勢力を失ってゆく。このことは逆にいえば、戦国後期に大名・国人勢力（一部地域では一向宗）が地域社会において果たすようになる役割をその前代において「山の寺」が担っていたことを示唆するといえよう（高島市教育委員会編『高島の山城と北陸道一城下の景観』サンライズ出版、2006年）。

「山の寺」については、かつて一山寺院として、寺院史の立場から、その僧侶組織に関する研究がなされたことがあった（吉井敏幸「近世初期一山寺院の寺僧集団」『日本史研究』266、1984年など）。しかし、仏教史研究では意外なことにほとんど蓄積がない。また一山寺院の研究も主に文献史料から行われたもので、「山の寺」の場（空間）の実態や、地域社会におけるその役割などについて十分目配りがなされていたわけではない。これに対して近年、山中に展開する坊院跡の広がり注目し、「山の寺」の場としての性格解明を重視する研究が進められてきた。一つの潮流は、城郭史研究の視角でなされたもので、戦国後期の武家の城づくりに先行する「山の寺」の構造を分析するものである。縄張図によって「山の寺」の全体像を描き、本坊や中心道路の構成、周縁部の土塁・堀などの防御施設のあり方を明らかにしている（『忘れられた霊場をさぐる一栗東・湖南の山寺復元の試み一』栗東市教育委員会他、2005年）。

もうひとつは、発掘調査や参詣曼荼羅などの絵画史料をもとに「山の寺」の建物を復元したり、そこで営まれていた信仰生活や他地域との交流を解明しようとしたりするものである。これは、「山の寺」の遺構を地域の文化資源とみなして活用をはかり、町おこしの素材として利用したりすることにつなが

る（国立歴史民俗博物館編『神と仏のいる風景―社寺絵図を読み解く』山川出版社、2003年など）。その代表は国史跡に指定されている越前国平泉寺（福井県勝山市）や紀伊国根来寺（和歌山県岩出市）である。発掘調査にいたらないまでも、山中にわけ入れば人工的に造成された坊院跡の形状は容易に看取することができることから、近年は全国でこのような「山の寺」の遺跡への注目が高まっている。

「山の寺」の大半は、戦国期に焼亡したり、廃仏毀釈を期に退転したりして、現在、坊舎を残していない。しかし、規模を大幅に縮小しつつも、本坊地区にのみ近世の建物が建っていて、建造物・仏像などの文化財調査がなされている場合もある。この他、「山の寺」が地域社会の中で果たす中心性、経済センターとしての機能、計画的な集落プランなどに注目して、それを中世都市の一類型として評価しようとする研究がある（前川要「中世近江における寺院集落の諸様相」『日本考古学』19、2005年。多賀町教育委員会編『敏満寺は中世都市か―戦国近江における寺と墓』サンライズ出版、2006年）。

このように、さまざまな視点から分析されてきた「山の寺」であるが、地域によって、坊院跡の保存状況、発掘調査の進行、絵画史料や現存建物の有無、さらには地元住民や文化財保護機関（教育委員会）の関心に大きな偏差があることもあり、統一的、悉皆的な調査・研究は全くといってよいほど行われていないのが現状である。開発によって、十分に顧みられることもなく破壊されていった「山の寺」も決して少なくない。

2. 研究の目的

こうした現状に鑑み、本研究では、多様なアプローチの存在する「山の寺」研究を総合的に進め、その歴史的意義を解明するための

学際的方法の開発を目標とした。また、その前提として、「山の寺」についての基礎的なデータ収集をおこなった。

本研究では、こうしたデータを可能な限り広範かつ詳細に収集することで、「山の寺」の全体像を解明する第一歩とする。ただ、どのようなデータを収集し、分析するかは、新しい研究方法の開発と相互関係にある。そこで本研究では、単にデータを集めるだけでなく、総合的研究のモデルを確立するため、いくつかの「山の寺」を対象にしたケーススタディをおこない、その実践例を広く紹介してゆく。具体的には、研究会やシンポジウムを開催することで、研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者（以下、「研究参加者」と略す）の間で研究方法の交流をはかった。また、シンポジウムなどに各地の文化財関係者や市民に参加してもらうことで、「山の寺」研究の重要性をアピールしてデータ収集への協力をあおぎ、また遺跡の認知・保存を訴える場ともした。

「山の寺」については、各地で調査がなされているものの、限られた事例に立脚するものが多いため、その成果は地域的な広がりをもたず、またそこで得られた知見が一般性を持つかどうか評価できないでいる。さらに、それぞれの研究分野・視角で得られた成果が十分な学際的交流を果たせず、研究の総合化がなされてこなかった。全国の「山の寺」の事例を収集するような試みもなされてこなかった。本研究によって、基礎的なデータが収集されるとともに、研究者や研究組織がネットワーク化することで、今後の継続的な研究活動の出発点を構築する。

「山の寺」は、戦国期の城郭・城館に先行して日本全国にあまねく分布し、中世の地域社会像を如実に物語る貴重な素材である。また「山の寺」には、建造物・文書・絵画・仏

像など、多様な文化財が残されている。そのため世界遺産暫定一覧表への記載候補地に多くの「山の寺」が立地しており、文化庁が現在検討している「歴史文化基本構想」の策定や「歴史文化保存活用区域」の設定にあたって恰好の対象となってもいる。さらに、「山の寺」のなかには、地域に密着して大切にされているものも多く、その保存・活用は今後のまちづくり、地域の活性化に貢献できる。本研究はそうした側面からも大きな意義を有するといえよう。

3. 研究の方法

(1) 現地調査と研究会

1年に2～4回、全国各地の「山の寺」の現地調査と現地研究会（2泊3日）を行った。テーマ別研究担当者はそれぞれのテーマに則って、本堂地区から坊院跡にかけて遺構・建物・地形などを調査し、また文献史料、絵図・地図などを収集する。地域別研究担当者は他地域の「山の寺」の実像を探ることで、自らの担当地域の調査やデータ収集の指針を得る機会とする。調査にあたっては、地元の文化財関係者の協力を仰ぐ。また、「研究参加者」が順次発表する研究会をあわせて開催し、具体的な研究方法や理論研究の相互交流をはかった。

(2) シンポジウム

「山の寺」研究を先進的に進める一方、その重要性、有効性を広く周知するため、1年に2回程度、これまで研究の進んでいる「山の寺」を対象にしてシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、地域別研究担当者を中心とする地元研究者による具体的な報告と、テーマ別研究担当者などによる全国的見地からの報告をかみあわせ、当該の「山の寺」の歴史的意義を浮かび上がらせた。

シンポジウムには、データ収集者の方々にも集ってもらい、「山の寺」の研究方法や

歴史的意義について学んでいただくとともに、地元教育委員会の後援を得るなどして広く市民に公開し、「山の寺」の重要性を広報する場とした。山寺サミットと連携することで、より広範な市民を対象とする会とすることも行った。

4. 研究成果

本研究においては、都市史、寺院史、考古学、建築史、歴史地理学、城郭史など、「山の寺」に多様な側面からアプローチする方法論・理論を開発するとともに、分布・現状・史資料などの「山の寺」のデータを収集し、情報の共有化・総合化をはかった。

その中で、各地の「山の寺」研究のケーススタディに接し、また各地でシンポジウムを開催するなかで、さまざまな論点を学ばせていただいた。また、研究者や研究組織のネットワーク化をおこない、今後の継続的な研究活動の出発点を構築することができた。

戦国時代、城郭や城館が列島各地にあまねく分布したことから、社会を考える上での貴重な素材であることはすでによく知られている。「山の寺」はこうした中世城館に先行して普遍的に展開しており、やはり中世の地域社会像を如実に物語る重要なファクターであるといえるだろう。

「山の寺」が代表するのは、武家ではなく、寺社、信仰の世界である。中世城館の圧倒的多数が16世紀に出現するのに対し、「山の寺」は10世紀以降、16世紀まで存続する。また、15世紀後半以降に進む、武家の地域形成が最終的に近世につながるのに対し、「山の寺」が代表するのは、16世紀末に断絶し、基本的に近世につながらない地域社会のあり方である。そうした意味では、「山の寺」こそ、中世プロパーな時代の中核施設であり、地域社会を代表する存在であるといえるかもしれない。

現在、「山の寺」を後継する寺院、あるいは村には、建造物、古文書・絵画、仏像など、多様な文化財が残され、地域に密着して大切にされている。山中のそこに残る坊院跡のひな壇と、こうした文化財を結びつけ、「山の寺」を総合的に保存・活用することは、今後の町づくり、地域の活性化に貢献できるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①仁木 宏、日本中世における「山の寺」研究の意義と方法、遺跡学研究 8、2011年、p. 58-63、査読無
- ②上川通夫、普門寺(豊橋市)所蔵永暦二年永意起請木札について、愛知県史研究 14、pp. 101-115、2010年、査読無
- ③仁木宏、近江国石寺『楽市』の再検討、都市と城館の中世—学融合研究の試み—(高志書院)、pp. 87-103、2010年、査読無
- ④仁木宏、中世都市社会の変容—町形成以前の京都—、都市の歴史的形成と文化創造力、pp. 47-57、2010年、査読無
- ⑤仁木宏、美濃加納楽市令の再検討、日本史研究 557、pp. 1-25、2009年、査読有

[学会発表] (計3件)

- ①仁木 宏、日本中世における「山の寺」研究の意義、西村山地域史研究会 30周年記念大会、2011.10.5、寒河江市文化センター
- ②仁木宏、戦国時代敏満寺の繁栄、シンポジウム「最盛期敏満寺を復元する」、2010.11.6、あけぼのパーク多賀
- ③仁木宏、都市史研究から見た石見銀山、2009年度島根史学会大会、2009.9.5、島根県民会館

[図書] (計3件)

- ①上川通夫、塙書房、中世日本仏教と東アジア世界、2011年、367p
- ②下坂守、吉川弘文館、京を支配する山法師たち—中世延暦寺の富と力、2011年、237p
- ③仁木宏、思文閣出版、京都の都市共同体と権力、2010年、311p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁木 宏 (NIKI HIROSHI)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90222182

(2) 研究分担者

上川 通夫 (KAMIKAWA MITIO)
愛知県立大学・日本文化学部・教授
研究者番号：23901214

下坂 守 (SHIMOSAKA MAMORU)
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：34603201

山岸 常人 (YAMAGISHI TUNETO)
京都大学・工学(系)研究科(研究院)・
准教授
研究者番号：14301885

(3) 連携研究者

該当なし